

## ■読みに困難のある子どもたちへの実践事例

# 読みの困難を抱えた児童への読書活動での活用⑧ ～学校図書館との連携で広がる読書環境③～

島根県安来市立荒島小学校  
教諭 井上 賞子

### 研究目的

読みの困難を抱えている対象児童に対し、音声の補助がある読書環境を整えていくことで、本の世界を楽しむ体験につなげていく

### 活用実態

#### ○昨年度までの取り組み概要

「わいわい文庫」が、読みに困難のある子どもたちにとって有効な手段であることは、長く実感してきています。一方で、必要な子どもたちがいるにもかかわらず、「活用の継続や広がり」には、ずっと有効な手立てが打てず悩んでいました。

#### <わいわい文庫活用時の課題>

- ・ドライブのない端末で見るとするには、あらかじめデータを端末に入れておくことが必要になる。
- ・書影ポスターで読みたいものを決めても、そのデータをたくさんのデータから探し出してインストールするのにいくつもの行程が必要で、なかなか日常化することがむずかしい。

それが一昨年度、大きな転機を迎えます。1人1台の端末と校内Wi-Fi環境が整ったタイミングで、「わいわい文庫」が国会図書館に收藏され、学校図書館を経由することで、ウェブから個人の端末に貸し出すことができるようになったのです。

「オンラインでの貸し出し」「自分の端末で自分のペースで読める」が可能になったことで、

- ①読みたいと思ったものをスムーズに貸し出してもらえる
- ②（提供する側が児童の端末へのインストール管理までしなくて良くなったことで）学校図書館を利用することができるようになった

という、読みに困難がない子であれば当たり前前に保障されていた環境を、やっと整えることができました。「わいわい文庫」を読んだ場合でも、図書館で借りた他の本と同様に記録に反映できるようになったことも、「もっと読みたい」というモチベーションにつながっていきました。

（『わいわい文庫活用術10』25ページ、『わ

いわい文庫活用術11』41ページ参照)

### ○今年度の実践

そこで今年度も、「国会図書館から学校図書館を通じて『いわい文庫』を対象児童個人の端末に貸し出す」ことで、読みの困難を抱えた子どもたちが「日常的に読書を楽しめる」環境の構築に継続して取り組みました。

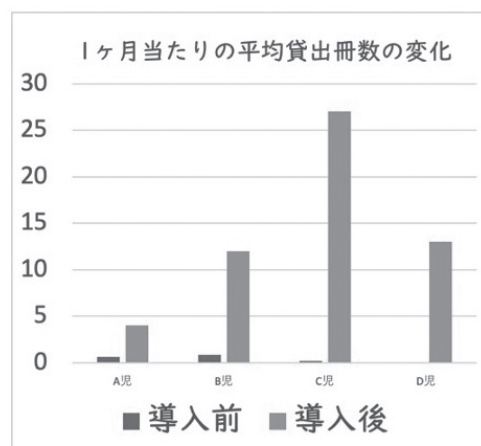
## 成果 — 知的障害特別支援学級での実践から

### ○読書環境の改善による読書の日常化

#### <運用の実際>

- ・「いわい文庫」の書影ポスターから、読みたい本を選ぶ。
- ・「よみたいですカード」に記入し、司書に提出する。
- ・司書は図書館のパソコンから国会図書館にアクセスし、該当の書籍のデータをダウンロードし、ウェブ上のアカウントへアップロードする。
- ・翌日の朝、自分の端末へダウンロードする。(アップされたデータは24時間で消えるため)
- ・自分のペースで読書を楽しんだ後、「よみましたカード」に記入し司書に提出する。
- ・司書が学校図書館からの貸し出しとして登録する。

2021年12月から上記のシステムでの貸し出しを開始し、2年間問題なく運用が継続できています。知的障害支援学級に在籍している4名の児童にとって、読書が日常化してきたことは、下図の「1ヶ月当たりの平均貸出冊数の変化」からも明らかです。



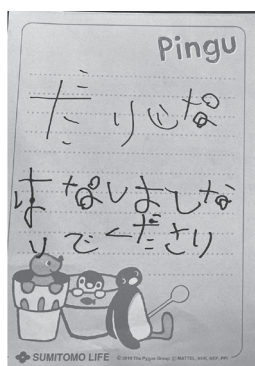
また、従来の紙の本の貸し出しと同様に「学校図書館からの貸し出し」としてカウントしているため、個人端末への貸し出しが始まって以降、特にたくさんの本を読むC児については、通常学級も含めて、校内の貸し出し冊数がNO.1の状態が継続しています。このシステムを導入する前にはむずかしかった、読書の日常化を実現させることができました。

C児とD児は、発語が少なく、困っていることやしたいことを伝えるのがむずかしい状況でした。そのため、以前は不適応な行動も目立っていました。

しかし最近では、読書を日常的に楽しむことで、文字を通じた情報のやり取りがスムーズになっています。これにより、「書かれた内容から情報を得て見通しを持つ」ことや、「書いた言葉で思いや願いを伝える」ことができるようになりました。その結果、以前のような不適応な行動は見られなくなりました。

### <C児エピソード>

- ・お母さんから「大事な話をしているからちょっと待っててね」と言われて「だいじなはなしお(を)しないでください」とメモに書いて渡して、気持ちを伝えた。



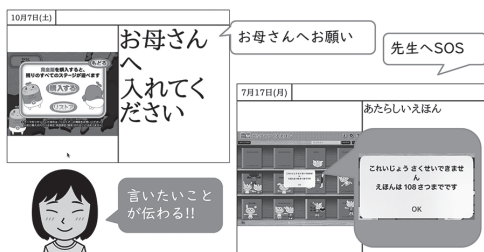
実際のメモ

- ・いつもは自分の知らない人が教室にいと嫌がって外に引っ張っていこうとしたりするのに、市内の司書の先生達数名が「わいわい文庫を読んでいるところを見たい」と来られた際は、自信たっぷりに自分でセッティングして、ノリノリで大好きな『どろぼうがっこう』を読んでいる姿を見ていただくことができた。



### <D児エピソード>

- ・50音キーボードの使い方を覚えて、困ったことがあると、写真とテキストで伝えてくるようになった。
- ・39ページの写真の左側は、お母さんにアプリを入れてほしいとお願いした時のもの。
- ・写真の右側は、お気に入りの絵本アプリで新しい絵本が作れなくなった時、画像とテキストで困っていることを教師に伝えてきた時のもの（画像がモノクロになっているのはD児による加工。エラーメッセージを拡大した表示は、説明のために教師が付け加えたもの）。



個人のイヤホンは、袋に色テープを貼って管理

また、「自分で好きな本を読みたい時に読める」という状況は、自信につながっていると感じる場面も見られました。

## 通常学級での実践から

### ○朝読書の時間を活用しての取り組み

昨年度まで支援学級の児童を対象として行ってきた取り組みを、今年度からは通常学級に在籍している読みに困難を持つ児童にも広げていきました。

なれるまでは、困った時にすぐにフォローができるように、朝読書の時間に図書室で行い、司書の先生が支援に入ってくださいる形で進めました。

#### <運用の実際>

- ・貸し出しシステムは、支援学級で継続してきた形をそのまま活用
- ・通常学級の教室での読書でも活用することを見据えて、イヤホンの使用も合わせて導入
- ・「聞いての内容把握」の意識づけと、有効性を確かめるために、時間の終わりに司書の先生からその日に読んだ内容に関わる簡単な質問に答える

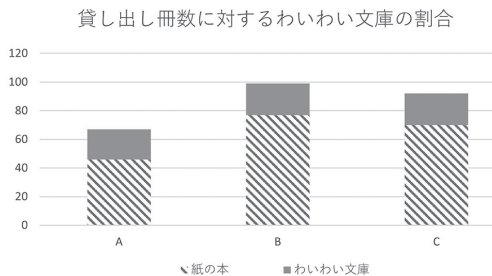


イヤホンで音を聞きながら読んでいる様子

今回通常学級で「わいわい文庫」の活用に取り組んだ子どもたちの貸し出し冊数に対する「わいわい文庫」の割合は、40ページの表のようになりました。

A児は3割、B児・C児は2割の本を、「わいわい文庫」で読んでいました。授業に関わる調べ学習などで使うものは、どうしても紙の本しかないものもありますが、「読書を楽しむ」場面では、かなりの割合で「わいわい文庫」を読んでいることがうかがわれました。

特にA児は、授業で借りる以外の本はあまり手に取ることがなかったので、「わいわい文庫」を活用することで、読書を楽しめる時間が増えています。



貸し出し冊数に対するわいわい文庫の割合

### ○取り組みを振り返って

「オンラインでの貸し出し」「自分の端末で自分のペースで読める」が可能になったことで、やっと模索を続けてきた「読みに困難のある子どもへの読書環境の整備」が継続可能な形で実現できました。

読みに困難のある子どもは、どうしても触れる言葉や文章が少なくなってしまうがちです。だからこそ、むしろ読書の機会はより必要だと感じています。

言葉の世界を広げ、情報を受け取ったり、自分の思いや考えを伝えたりしていくことができることで、日常生活の質も変わっていくことを、特に機会喪失がこれまで顕著だったC児、D児の姿を見ながら実感しています。

今年度からスタートした通常学級にいる読みに困難のある子どもへの「わいわい文庫」の貸し出しも、支援学級への貸し出しを通じて校内のシステムが整っていたことが、スムーズな運用につながったと感じています。

このテーマでの実践を始めて以降、ずっと「通常学級での継続可能な実践」を模索してきました。図書館を軸にした取り組みをしていた前々任校では、通常学級の対象児童にも提供できるところまでいきましたが、端末の確保や貸し出しの負担の大きさがネックになり、核になる人が転勤すると、継続がむずかしくなっていました。前任校では、個別の場での支援の中での読書環境の整備はできましたが、図書館との連携につなげることができず、その時に介入したケースのみの取り組みで止まってしまいました。

必要としている子どもがいることがわかっているのに、その子どもに応じた読書環境が、対象となる子どもに対して継続して提供できない状況はずっと悩ましかったので、今年度、それが達成できる取り組みができたことはよかったです。

### 来年度に向けて

学校図書館が、どの子どもにとっても読書を楽しめる場になるうえで、一昨年度から行っているこの取り組みは有効だと感じています。読むことに困難のある子どもがすべての学校にもいることがわかってきたいま、どの学校図書館でも、このシステムを必要としていると思います。たくさんの学校図書館が承認館になり、多くの貸し出し

リクエストが国会図書館に届けば届くほど、こうしたニーズの高さを社会に知らせていくことにもつながっていきます。

一方で、「一人ひとりの端末に貸し出すことができる」この方法の情報が、まだまだ届いていない学校も多いです。

そこで、来年度以降も、たくさんの

学校に知ってもらうための啓発活動を継続していきます。

また、通常学級の子どもたちへの貸し出しも継続し、朝読書の時間に限らず、対象の子どもたちが、いつでも自分のペースで読書ができる環境を作っていきたいと思います。

